2025年6月15日  川越教会

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　丸山　勉

空しい人生なんてない

［フィリピの信徒への手紙3章2～11節］

あの犬どもに注意しなさい。よこしまな働き手たちに気をつけなさい。切り傷にすぎない割礼を持つ者たちを警戒しなさい。彼らではなく、わたしたちこそ真の割礼を受けた者です。わたしたちは神の霊によって礼拝し、キリスト・イエスを誇りとし、肉に頼らないからです。とはいえ、肉にも頼ろうと思えば、わたしは頼れなくはない。だれかほかに、肉に頼れると思う人がいるなら、わたしはなおさらのことです。わたしは生まれて八日目に割礼を受け、イスラエルの民に属し、ベニヤミン族の出身で、ヘブライ人の中のヘブライ人です。律法に関してはファリサイ派の一員、熱心さの点では教会の迫害者、律法の義については非のうちどころのない者でした。しかし、わたしにとって有利であったこれらのことを、キリストのゆえに損失と見なすようになったのです。そればかりか、わたしの主キリスト・イエスを知ることのあまりのすばらしさに、今では他の一切を損失とみています。キリストのゆえに、わたしはすべてを失いましたが、それらを塵あくたと見なしています。キリストを得、キリストの内にいる者と認められるためです。わたしには、律法から生じる自分の義ではなく、キリストへの信仰による義、信仰に基づいて神から与えられる義があります。わたしは、キリストとその復活の力とを知り、その苦しみにあずかって、その死の姿にあやかりながら、何とかして死者の中からの復活に達したいのです。

[1] 「キリストのバカになりたい」

　パウロが書いた「フィリピの信徒への手紙」をご一緒に読んでいます。この手紙は、全部で4章しかありませんが、パウロの中にある「喜び」が文面から溢れている手紙だと思います。私自身とても好きです。特に今日の第3章は、パウロという人物がどういう存在なのか良く分かる章になっていると思います。

　私は改めて今回この部分を読んで、私が大学生だった時に、板橋区の赤塚教会の青年会の中で私を信仰に導いてくれた青年の一人を思い出しました。その方は沖縄生まれの兼浜さんという男の人で、確か私よりも5～6才位年上だったと思います。その兼浜さんは、実は脳腫瘍になってしまって、今の私よりも大分若い時に、もう主のみ許に帰ってしまいました。東京に上京していた時は、海外で日本語の教師になることを目指して、アルバイトをしていた新聞配達の専売所の2階に住み込みをしながら、又、教会生活も送っていた方だったのです。あたたかくて、でも素朴で実直な人で、そう言えば青年会の聖書研究会などで、よくこういう言葉を言っていたなぁ、というのを思い出しました。それは「自分は、キリストのバカになりたい」ということでした。「自分は、キリストのバカになりたい」。本当に愚か者のようにイエス・キリストを信じ、従って行きたい、そういうことではないかと思います。その言葉は、当時まだ信仰を持っていなかった私にはとても印象的な言葉でした。そして又、私もそう言えたらどんなにいいだろうかという、憧れのようなものを与えてくれたようにも思うのです。

[2] キリストと出会わされて

　今日の御言葉の中で、使徒パウロは、ある意味、自分の中の価値観がひっくり返されたことを喜びと共に語っていると思うのですが、それは、パウロという人がそれこそ「キリストのバカ」になった、という告白でもあるように思うのです。パウロは、これまで自分がとても大切にしてきた生き方を述べた後で、こう言っていますね。3:7～9の前半までを読んでみます。「…しかし、わたしにとって有利であったこれらのことを、キリストのゆえに損失と見なすようになったのです。そればかりか、わたしの主キリスト・イエスを知ることのあまりのすばらしさに、今では他の一切を損失とみています。キリストのゆえに、わたしはすべてを失いましたが、それらを塵あくたと見なしています。キリストを得、キリストの内にいる者と認められるためです。」ここで「わたしにとって有利であったもの」が、今や「キリストのゆえに損（失）と思うようになった」とパウロは語っていますが、これは凄い言葉ではないかと思うのです。彼がこれまで「有利」と思っていたものというのは、今の言葉でいえば、学歴、家柄、伝統、そして、自分は他人よりも秀でているという誇りです。プライドです。それは決して悪いものではないでしょう。人はそういうものによって支えられる部分はありますし、だからこそ一生懸命受験勉強をしたり、職探しをなどするのだと思います。自ら努力するということが、自分の人生の確立に繋がるし、生きる自信にもなる。それはあると思います。しかし、本当の意味で自分を支えるものは、そういう自分の努力を超えたものだったと彼は気付かされたのです。これはとても大事なことではないでしょうか？

　パウロはこれまでの自分を客観的に見てこう言っていますね。います。少し戻りますが4節以下です。「肉にも頼ろうと思えば、わたしは頼れなくはない。だれかほかに、肉に頼れると思う人がいるなら、わたしはなおさらのことです。わたしは生まれて八日目に割礼を受け、イスラエルの民に属し、ベニヤミン族の出身で、ヘブライ人の中のヘブライ人です。律法に関してはファリサイ派の一員、熱心さの点では教会の迫害者、律法の義については非のうちどころのない者でした。」　これだけ聞くと嫌ですよね。鼻につきます。何てプライドの高い男なんだ、パウロは！と思います。しかし、彼はこれを「つまらないもの・損失と思えるもの」のリストとして挙げているのです。かつての自分はこんなことにこだわっていたんだよ、笑ってくれよ、と言わんばかりです。問題は、何が彼にそう言わしめたか、です。それはもうハッキリ語っています。―「キリストのゆえに損失と見なすようになったのです」と。‟キリスト”に出会ったからなのですと。

　よく「価値観の転換」とか「価値観の逆転」という言い方を私たちすることがあると思いますし、私たちが主イエス様を信じる信仰に導かれることを、「価値観が変わった」という言い方をすることが出来るとも思うのですが、私は、イエス様と出会うというのは、単に価値観の変革というよりはそれ以上のことではないだろうかと思うのです。と言うのは、人の心というのは移り気だと思うからです。一つの同じ価値観でずっと生きて行くというのは結構難しいことではないかと思うのです。例えば、最近はよく「推し活」なんて言いますけれども、あの「推し」の対象も割と短い期間で変わってしまうということがあるのではないでしょうか？信仰の世界は「推し」ではないと思うのです。信仰とは、価値観がグルグル変わって行くようなものとは違うと思うのです。その点、パウロの言葉はある意味強烈です。8節で「キリストのゆえに、わたしはすべてを失いましたが、それらを塵あくたと見なしています」と言っています。もう、キリストに出会ってからは、これまでの自分のプライドを支えていたモノは、ゴミだ、と言っているのです。「塵あくた」だと。以前の私が馴染んでいた口語訳はもっとビックリする表現でした。「キリストのゆえに、わたしはすべてを失ったが、それらのものをふん土のように思っている」。「ふん土」。今風の言葉でいえば、「クソ」ですよ。パウロは振り返って言うのです。‟これまで自分はクソと思えるものを大事に抱えてきたのだ。キリストと出会わされて、それが本当に分かった”と。

　先のパウロの自慢の羅列を見ても分かるように、彼はとても「宗教的」な人間でした。とことん旧約聖書の律法遵守することが、神に近づけることだと思って、他の誰よりもそのことに熱心でした。そしえ、彼は何をやっていたかと言うと、「教会の迫害者」として熱心だったと。信仰のゆえに迫害を受けるというのではなく、自分の信仰を守るために、キリスト者を迫害していたというのです。他者を裁くことで、自分の立ち位置を守る。…なんと、窮屈で平安のない信仰でしょうか！私は、きっと彼の心の底はとても空しいものがあったと思います。けれどその空しさは、隠されていたのだと思います。―その彼が、あのキリスト者たちを迫害するためにダマスコに向かう途上で、イエス・キリストと出会ったのです。

[3] 私たちのために「空しく」なられたイエス・キリスト

実は私たちも同じだと思います。自分で自分を確立しているようでいて、人を裁き、人との比較の中で生きていないでしょうか？又、忙しくしている時は隠されてはいても、何かの折に、どこか自分の生き方の空しさを深く感じせられたりすることもあるのではないでしょうか。「俺の人生、私の人生って、結局何なのだろう」と、空しさが襲うことがないでしょうか？パウロ自身は、人生の挫折の経験の中で、それを深く思ったのだと思います。そして、その自分の空しさの只中にこそ、イエス・キリストは来て下さったお方なのだ！と知ったのだと思います。

　フィリピ2:6以下のいわゆる「キリスト賛歌」と呼ばれる部分で、キリストのことをこのように賛美しているのです。―「キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になられました。人間の姿で現れ、へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。このため、神はキリストを高く上げ、あらゆる名にまさる名をお与えになりました。」

この「かえって自分を無にして」という部分は、口語訳では「おのれをむなしうして僕のかたちを取り」となっていました。キリストは空しさを知っている、いや、それを真の意味で体験した方です。私たちの空しい人生を放っておかない方です。そして、一緒に生きる者として人となって下さり、それどころか私たちが支払うべき神様への負債を皆、私たちの罪の身代わりとなって支払い切って下さいました！それがあの十字架ですね。アンパンマンは、苦しんでいる者に、自分の頭をちぎってその人に与えていますが、あの発想は、イエス・キリストの十字架の愛や最後の晩餐だとも言われますが、そうかもしれません。主は（当たり前ですが）アンパンマン以上に、私たちのこと放っておけないお方なのです！あなたの問題は、わたしの問題だ。そして、あなたの命はわたしの命と、もう繋げられているんだ。あなたの人生は決して空しさの中で終わることはない！そのためにわたしはあなたの救い主として来たんだ、とおっしゃっているのだと思います。

　キリスト者になるということは、宗教的なエリートになることではなりませんね。むしろ逆ですね。本当に「キリストのバカ」になることだと思います。まずキリストご自身が「バカ」になって、空しい私たちのために連帯し、身を献げて下さったことを覚えていたいと思います。この主が私たちの人生を捕えていて下さっています。感謝し、主と共に生きて行きましょう。お祈りを致します。

主イエス・キリストの父なる神様、あなたがいて下さるので、私たちの人生は空しくないと言えます。それは何にも勝る私たちの支えです。私たちのために愚かになって下さったあなたを讃え、感謝致します。主よ、私をば捕え給え。そして、どうぞ日毎に、キリストの内に自分を見出し、他者と共に生きて行く空しくない生き方へと導いて下さい。主の御名によって祈ります。アーメン。